

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	楊 潔 氷
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目 中国語を母語とする上級・超級日本語学習者における中日2言語の口頭翻訳過程 －単語の種類と課題の種類を操作した実験的検討－			
論文審査担当者			
主 査	教 授	松 見	法 男
審査委員	教 授	中 條	和 光
審査委員	教 授	間 瀬	茂 夫
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、中国語を母語とする上級日本語学習者（以下、上級学習者）と超級日本語学習者（以下、超級学習者）を対象に、翻訳の方向性を操作し、中国語と日本語（以下、中日）の2言語間における口頭翻訳過程を検討したものである。2言語の口頭翻訳過程には、起点言語（SL）の理解、コード・スイッチング、目標言語（TL）による訳出、が含まれる。SLを理解する段階でコード・スイッチングが開始されるならば、2言語の口頭翻訳過程は水平的アプローチによるものと解釈される。他方、SLを理解した後にコード・スイッチングが行われるならば、2言語の口頭翻訳過程は垂直的アプローチによるものと解釈される。本研究ではこの観点に基づき4つの実験を行った。実験では、復唱課題と口頭翻訳課題を用いて、中日の同形同義語と同形異義語がターゲット単語または対訳単語として文中にある場合のSLの音読時間を比較した。そして、実験参加者の口頭翻訳文を分析し、同形異義語が誤訳されやすい原因を探り、教育的示唆を導出した。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、翻訳と通訳の定義を整理し、本研究における口頭翻訳の位置づけを述べた。2言語の口頭翻訳過程に関する先行研究、及び中日2言語の通訳に関する先行研究を概観し、口頭翻訳過程に影響を与える要因をまとめ、先行研究の問題点と改善点を見出した。そして、本研究の説明論理、目的及び意義を述べた。</p> <p>第2章では、4つの実験について記述した。実験1では、上級学習者を対象に、日本語復唱課題と日中口頭翻訳課題を用い、同形同義語または同形異義語がターゲット単語として文中にある場合の、日中口頭翻訳過程を検討した。実験の結果、日中口頭翻訳課題において、同形同義語は同形異義語より音読時間が有意に長かった。SLを音読しながら理解する際はTLも活性化され、コード・スイッチングが行われることが推測された。上級学習者の日中口頭翻訳過程は水平的アプローチによる可能性が高いことが示された。実験2では、上級学習者を対象に、中国語復唱課題と中日口頭翻訳課題を用い、文中におけるターゲット単語の対訳単語が同形同義語または同形異義語である場合の、中日口頭翻訳過程を検討した。実験の結果、中日口頭翻訳課題では、同形同義語に対応するターゲット単語は、同形異義語に対応するターゲット単語より音読時間が有意に長い傾向がみられた。SLを音</p>			

読しながら理解する際は、TL とのコード・スイッチングが行われることが推測された。上級学習者の中日口頭翻訳過程も水平的アプローチによる可能性が高いことが示された。実験 3 と実験 4 では、超級学習者を対象とした。実験 3 では、実験 1 と同様の方法を用いて、日中口頭翻訳過程を検討した。その結果、同形同義語と同形異義語の間で音読時間に有意な差はみられなかった。実験 4 では、実験 2 と同様の方法を用いて、中日口頭翻訳過程を検討した。その結果、同形同義語に対応するターゲット単語の音読時間と、同形異義語に対応するターゲット単語の音読時間の間に有意な差はみられなかった。翻訳の方向性にかかわらず、SL を音読しながら理解する際は、TL とのコード・スイッチングが行われないことが推測された。超級学習者における中日 2 言語の口頭翻訳過程は、垂直的アプローチによる可能性が高いことが示唆された。

第 3 章では、4 つの実験結果をふまえ、改訂階層モデルに基づき、中日 2 言語の口頭翻訳過程について、総合考察を行った。また、実験参加者の口頭翻訳文を分析し、語彙連結の視点から同形異義語が誤訳されやすい原因を明らかにした。同形異義語を適確に検索、産出させるためには、日本語単語の習得段階から、中日 2 言語の語彙表象間でより正確な連結を形成させることが重要であるといえる。同時通訳の訓練方法であるクイック・レスポンスやシャドーイングが、中日 2 言語間の正確な語彙連結の形成に有効であることを、教育的示唆として述べた。最後に、本研究の意義と今後の課題をまとめた。

本論文は、次の 3 点で高く評価できる。

1. 従来、中日 2 言語の通訳については、会議通訳のデータを基に情報の処理や誤訳を分析対象とする研究が行われていたが、認知心理学の視点による実験研究は見当たらなかった。本研究は、中日 2 言語の通訳過程を扱う実証的な基礎研究である。中日の口頭翻訳過程の解明は、異なる語族に属する 2 言語の通訳過程の解明にも繋がる。
2. 本研究は、中日 2 言語の口頭翻訳過程だけでなく、漢字単語の認知的処理を文レベルにおいても明らかにした。これまでの漢字単語の処理研究は、単語の単独呈示事態を採用したものが多く、文における単語の処理過程を検討したものは少なかった。本実験では、学習者に対して、漢字単語が含まれる文の音読遂行後に復唱課題と口頭翻訳課題を求めたため、漢字単語の処理過程の解明にも貢献できる結果が得られた。
3. 本研究では、音読時間だけでなく口頭翻訳文も分析対象とした。そのことにより、学習者の心内辞書における語彙連結の考えに基づき、中日の同形異義語が誤訳されやすい原因を探究し、通訳の視点から、日本語を含めた第二言語教育への示唆を導出できた。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 31 年 2 月 5 日